

出生順位と性格

依田 明*・飯嶋一恵*

Birth Order And Personality

Akira YODA* and Kazue IJIMA*

The purpose of this study was to examine the relationship between Birth order and Personality.

We referred to the investigation conducted by YODA and HUKATSU (1963). The subjects were 187 pairs of mothers and children. The children were in the fifth grade, and had one brother or one sister. The subjects were asked whether 51 personality trait items as reflected in daily activities applied to the first child or to the second child.

The main results were as follows;

- (1) The personality of First-born child and Next-born child were fairly established. Comparing with the results of the investigation in 1963, the contents of personality were no change.
- (2) The difference of personality traits between First-born and Next-born didn't come out clearly when the disparity of age was small.
- (3) When the First-born children were called their own name or nickname, the difference of personality traits didn't come out clearly.

I 目 的

性格形成の諸条件のひとつとして、出生順位の問題がある。出生順位によって、性格特性に差異が生ずるかどうかに関して、実証的研究をおこなったものに、依田・深津 (1962) の調査が挙げられる。この調査の目的は、

- (1) 長子、次子には、それぞれ具体的に、どのような性格特性があるか
- (2) 長子と次子の性格特性の差異には、きょうだいをめぐる環境条件が、どのように影響しているのか

ということであった。

調査の対象は、小学校4年から、中学2年に在学している児童・生徒 145 名と、その母親、合計 290 名であった。児童、生徒は、2 人きょうだいである者に限られた。

性格特性を調査する質問項目は、三木ら (1954 a, 1954 b) の考案した方法を参考にした。それは、日常生活場面でよくみられる行動の記述であり、きょうだいのどちらによりあてはまるかという、相対的判断を求めるものである。そして、親と子の回答を整理し、長子的性格をあらわす項目、次子的性格をあらわす項目を検討した。

* 心理学教室 (Dept. of Psychology)

この 1963 年調査の主要な結果は、次の 3 点に要約できる。

- (1) 長子は、自制的で、慎重で、ひかえめで、親切であるが、面倒なことを嫌う傾向がある。次子は、活動的で、快活であるが、おしゃべりで、甘ったれで、強情で、依存的で、やきもちやきである。また同時に、男子的性格・女子的性格も見出された。
- (2) きょうだいの年齢差が、2 歳～4 歳である時に、きょうだいの性格差異はもっとも顕著にあらわれる。
- (3) 日常生活において、きょうだいどうしがお互いの名前を固有名詞で呼びあっている場合は、次子が長子を、きょうだい内の地位をあらわす普通名詞で呼んでいる場合よりも、性格差異のあらわれ方は、有意に少ない。

長子的性格・次子的性格というものが存在することが明らかになったが、このきょうだいの性格の差異は、次の 2 つの要因によって、作り出されたものと考えられた。

第 1 は、出生順位の違いによる、生育環境の相違である。第 2 は、きょうだいに関する我が国独自の文化の影響である。男尊女卑・家父長制・家業の長子相続などといった、封建的な考え方は、日本独特のものと言えよう。このような文化のもとでは、親が子どもに期待する役割が、子どもの出生順位や性別によって、多様に分化していると考えられる。

この、1963 年調査は、1962 年 11 月におこなわれたものである。すでに、20 年近くの年月が経過したわけである。この間に、我が国のきょうだいの様相は、大きく変化した。家族形態の核家族化が進み、生まれてくる子どもの数が減っている。すなわち、一家族あたりの子どもの数が減少している。

一家族あたりの子どもの数が減少したことは、きょうだいの数の減少を意味する。現代は、2 人きょうだい、またはひとりっ子である者が大半をしめるようになった。

また、家族内での身分上の伝統的序列性も、大幅に弱められてきている。家族制度的な考え方は後退し、家庭内の対人関係の民主化が進んでいることも、きょうだい関係に変化をもたらす要因のひとつと言えよう。

本研究は、出生順位と性格との関連についての、年代的变化を検討することを、目的とする。

そこで、1963 年調査を、ほぼ同じかたちで再調査し、現在でも、長子的性格・次子的性格が存在しているのかどうかについて、検討した。

II 方 法

前述の、1963 年調査で使用された性格特性を調査する質問項目、51 項目を使用した。これらの項目は、日常生活場面でよくみられる行動の記述であり、きょうだいのどちらによりあてはまるかという、相対的判断を求めた。

さらに、性格特性に影響を与えると考えられる諸条件として、きょうだいの性別構成、年齢差の他に、日常生活で長子は、次子や親から何と呼ばれているかなどについて調査した。

III 調査対象及び調査手続

調査対象

神奈川県下の市立小学校5年の児童のうち、次の条件をみたす者と、その母親を被調査者とした。

- (1) 2人きょうだいであること
 - (2) 本人のきょうだいは、幼稚園から高等学校までに在園または在学していること
- 児童 187 名、母親 187 名、計 374 名が調査対象となった。

被調査児童のきょうだいの性別構成を、Table 1 に示す。この表は、たとえば 187 名の被調査児童のうち、男-男というきょうだい構成の、長子が 24 名、次子が 23 名であることを示している。

調査手続

児童に対しては、各学級担任に依頼し、教室において集団的に実施した。母親に対しては、児童に家庭へ調査用紙を持ち帰らせ、記入後は封をして、学校に提出してもらい、回収した。

調査期間は、1980 年 10 月であった。

IV 結果及び考察

1. 性格特性項目の妥当性の検討

調査結果の分析にあたって、まず、性格特性を調査した 51 項目の妥当性を検討した。

a) 長子であると回答する者が半数、次子であると回答する者が半数である項目について：これらの項目は、被調査者が、ある性格特性について、きょうだいの間に差がないと判断した項目であることを示しているとして、分析から除くために検定をおこなった。その結果、該当する項目は、No. 47 であった。また、被調査者の半数が、長子、次子どちらにも回答しなかった項目は見出されなかった。

b) 母親の回答と、児童の回答が、逆の傾向を示す項目について：これらの項目は、書かれている性格特性の読みとり方や、行動の感じとり方の判断の基準が、親と子とでは相違していることを示していると考えられる。分析から除くために検定をおこなったところ、該当する項目は見出されなかった。

c) 長子と次子の回答が、自分や相手にかたよる項目を、分析の対象から除くために、検定をおこなった。その結果、長子、次子ともに相手があてはまると回答する者が有意に多い項目として、No. 48 ($P <$

Table 1 被調査児童のきょうだいの性別構成

	きょうだいの性別構成								合計	
	MM		MF		FM		FF			
出生順位	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
人数(人)	24	23	27	26	26	21	18	22	95	92
合計	47		53		47		40		187	

注) M は男子, F は女子。
1 は長子, 2 は次子。

.05) が該当した。また、自分があてはまると回答する者が有意に多い項目として、No. 17, 19, 23, 31, 37, 42, 44, 50, 51 ($P < .05$) が該当した。

以上、a) b) c) より、長子的性格、次子的性格をあらわすものとして適当でない項目として、No. 17, 19, 23, 31, 37, 42, 44, 47, 48, 50, 51 の計 11 項目が挙げられ、これらは、分析の対象から除くことにした。

2. 長子的性格・次子的性格

性格特性に関する 51 項目から、1-a) b) c) より、上記の 11 項目を分析の対象から除いた。残った 40 項目について、項目ごとに児童と親の回答数を合計し、 X^2 検定をおこなった。そして、長子があてはまると回答した者が、次子があてはまると回答した者より有意に多い項目を、長子的性格をあらわす項目群とした。同様に、次子があてはまると回答した者が、長子があてはまると回答した者より有意に多い項目を、次子的性格をあらわす項目群とした。

長子的性格をあらわす項目として 10、次子的性格をあらわす項目として 15、計 25 項目に有意差が得られた。その内容を、Table 2 に示す。

長子に特徴的な性格としては、面倒なことが嫌いで、他人に自分の用を頼んだり押しつけたりするというように、困難な事柄に対しての取り組み方が消極的で、利己的な面がみ

Table 2 長子的性格・次子的性格

長子的性格				次子的性格			
項目番号	項目内容	x^2	P	項目番号	項目内容	x^2	P
④⑨	ひかえめ	71.12	**	⑩	母に甘える	141.36	**
21	遠慮	28.27	**	⑥	父に甘える	85.21	**
1	自分の用を人に押しつけたり頼んだりする	28.12	**	⑩	母に告げ口	55.11	**
⑨	話すより聞き手	17.01	**	⑳	お調子もの	51.84	**
35	母に口ごたえ	14.36	**	④①	父に告げ口	36.38	**
③③	めんどろが嫌い	13.00	**	③④	嫉妬	34.45	**
⑦	自制的	12.86	**	④	おしゃべり	31.59	**
⑳	仕事がいねい	10.65	**	③⑥	外で遊ぶことが好き	28.26	**
14	きちょうめん	7.39	**	⑳	人のまねがうまい	26.47	**
43	すましや	5.83	*	④⑩	知ったかぶり	24.34	**
				⑫	強情	19.28	**
				⑳	食事の好き嫌が多い	16.01	**
				㉑	依存的	16.00	**
				2	せっかち	9.76	**
				16	はきはきしてほがらか	8.81	**

* $P < .05$ ** $P < .01$

注) ○印：1963 年調査の長子的性格・次子的性格項目

られる。その反面、仕事を丁寧にやり、几帳面なところがあり、ひかえめで、自分からしゃべるよりも聞き手の側にまわり、ませたところがある。前回の調査結果と比較すると、遠慮、母に反抗、すましや、などの項目も新たに加わり、大人びて、気むずかしいといった面も強調されているようである。

次子においては、両親に甘えるという傾向が際立っており、依存的である。それに伴い、両親に告げ口をするというような、いわゆる、「いい子ちゃんぶった」ところもみられる。また、強情であったり、やきもちやきな、激しい気性の面があり、わがままである。そして、外で遊ぶことが好きで、外向的である。前回の調査結果と比較すると、明朗、せっかち、などが加わり、積極的で活動的な面がはっきりしている。

以上をまとめると、今回の調査結果は、1963年調査とほぼ同様の結果である。20年前と現在とでは、長子的性格・次子的性格に、大きな変化はみられなかった。このことは、1963年調査で明らかになった、長子・次子の性格特性は、ほぼ固定化しており、不変のものであることを示唆していると言えよう。長子と次子の性格差異の原因として、親の持つ役割期待の相違が挙げられている。我が国の伝統的な考え方といえる、「長幼の序」は、いまだに親の意識の中に残っており、それが養育態度にもあらわれていることがわかる。

3. 男子的性格・女子的性格

男子的性格・女子的性格の存在を検討するため、被調査者187名のうち、異性で構成されているきょうだい（兄と妹、姉と弟）を選びだした。

児童と親の回答数を合計し、 X^2 検定をおこなった。そして、男子があてはまると回答した者が、女子があてはまると回答した者より、有意に多い項目を、男子的性格をあらわ

Table 3 男子的性格・女子的性格

男子的性格				女子的性格			
項目番号	項目内容	x^2	P	項目番号	項目内容	x^2	P
8	こづかいを早く使う	27.87	**	④⑤	涙もろい	43.79	**
⑨	話すより聞き手	15.36	**	④	おしゃべり	42.63	**
③⑧	父にしかられる	12.77	**	⑪	着物や持ち物を気にする	28.50	**
③⑥	外で遊ぶことが好き	12.66	**	③④	嫉妬	23.21	**
26	気に入らないと乱暴	10.94	**	④⑧	すましや	19.56	**
③⑨	めんどろが嫌い	7.73	**	⑩	母に告げ口	19.45	**
24	食事の好き嫌が多い	6.28	*	④①	父に告げ口	9.31	**
				⑥	父に甘える	9.20	**
				⑭	きちょうめん	7.65	**
				21	遠慮	6.15	*
				16	はきはきしてほがらか	4.81	*

* $P < .05$ ** $P < .01$

注) ○印：1963年調査の男子的性格、女子的性格項目

す項目群とした。同様に、女子があてはまると回答した者が、男子があてはまると回答した者より有意に多い項目を、女子的性格をあらわす項目群とした。

その結果、男子的性格をあらわす項目として 7、女子的性格をあらわす項目として 11、計 18 項目に有意差がみられた。項目内容を、Table 3 に示す。

男子的性格は、「男らしさ」、女子的性格は、「女らしさ」と一般に言われているものと一致する傾向は、前回の調査と同様である。しかし、女子的性格において、自制的、親に対して素直、ひかえめ、などが除かれ、はきはきしてほがらかが、新たに加わっている。「女の子はおしとやか」というイメージが少し薄れ、現代女性が男性化している傾向のあらわれのひとつと言えよう。

また、女子的性格の 11 項目のうち、6 項目が次子的性格をあらわす項目と重複しており、女子的性格と次子的性格の類似は、1963 年調査と同様の結果である。

4. きょうだいの年齢差と性格

きょうだいの年齢差によって、長子的性格・次子的性格のあらわれ方がどのように違うかを検討した。

ここでは、長子的性格・次子的性格が、最も顕著にあらわれる年齢差はどのくらいかということ調べるために、被調査者を 2 人の年齢差によって、次の 3 群に分類した。

A 群：1 年～2 年

B 群：2 年 1 カ月～4 年

C 群：4 年 1 カ月以上

この 3 群に該当する人数を、Table 4 に示す。

1 群ごとに、2 と同様の操作をおこなって、長子があてはまる、または、次子があてはまると、有意に多く回答された項目を検定した。そして、長子・次子それぞれに有意差がみられた項目数の合計を比較し、項目数が多い群ほど、長子・次子の性格特性がより明確にあらわれていると考えた。

3 群それぞれ、有意差のあった項目の数は、A 群：16、B 群：21、C 群：21 であった。項目内容を Table 5 に示す。各群の項目数の差を X^2 検定した結果、有意差はみられなかった。しかし、きょうだいの年齢差が近いほど、長子・次子の性格的差異ははっきりとあらわれないという傾向がうかがわれる。

Table 4 年齢差別被調査児童の人数

群	性 別 構 成				合 計
	MM	MF	FM	FF	
A	3	8	7	4	22
B	24	30	18	20	92
C	20	15	22	16	73

A：1 年～2 年 B：2 年 1 ヶ月～4 年
C：4 年 1 ヶ月以上

1963 年調査では、年齢差が 2～4 年の場合が、性格的差異が最も明確であり、それ以外の場合では、それほどはっきりとあらわれないという結果であった。今回の調査では、2～4 年の群と、4 年以上の群との間には、項目数の差

Table 5 きょうだいの年齢差と性格

A 群: 1年~2年		B 群: 2年1ヶ月~4年		C 群: 4年1ヶ月以上	
長子的性格	次子的性格	長子的性格	次子的性格	長子的性格	次子的性格
1. 自分の用を押しつける 49. ひかえめ 43. すまじや 18. 一生懸命仕事する 32. はずかしがり 29. 仕事があてない 7. 自制的	30. 母に甘える 28. お調子もの 6. 父に甘える 16. はきはきしてほがらか 40. 知ったかぶり 24. 食事の好き嫌い多い 10. 母に告げ口 4. おしゃべり 36. 外で遊ぶのが好き	49. ひかえめ 33. めんどろが嫌い 1. 自分の用を押しつける 9. 話すより聞き手 21. 遠慮 35. 母に口ごたえ 14. きちようめん	30. 母に甘える 6. 父に甘える 28. お調子もの 10. 母に告げ口 41. 父に告げ口 22. 人のまねがうまい 34. 嫉妬 20. 依存的 4. おしゃべり 2. せっかち 40. 知ったかぶり 18. 一生懸命仕事する 12. 強情 24. 食事の好き嫌い多い	49. ひかえめ 21. 遠慮 7. 自制的 1. 自分の用を押しつける 9. 話すより聞き手 14. きちようめん 29. 仕事があてない 35. 母に告げ口	30. 母に甘える 6. 父に甘える 36. 外で遊ぶのが好き 41. 父に告げ口 10. 母に告げ口 34. 嫉妬 4. おしゃべり 12. 強情 22. 人のまねがうまい 40. 知ったかぶり 28. お調子もの 20. 依存的 24. 食事の好き嫌い多い
16		21		21	

がみられなかった。

5. 呼称方法と性格

日常生活における、長子の呼ばれ方は、名前や愛称などの固有名詞で呼ばれる場合と、きょうだい内の地位をあらわす普通名詞で呼ばれる場合の、2通りが考えられる。

親が長子と呼ぶ時、名前で呼ばずに「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」などといった、普通名詞で呼ぶということは、その子ども自身の役割に加えて、きょうだい内の地位にあたえられている役割行動を、長子が行うことを期待していると考えられる。つまり、「長幼の序」を重んじる養育態度をもっていると言える。

反対に、きょうだいの間に差別をつけるべきでないと考えている親は、日常生活では、長子を固有

Table 6 呼称方法別被調査児童の人数

群	性別構成				合計(%)
	MM	MF	FM	FF	
A	5	6	5	8	24(12.8)
B	24	25	21	21	91(48.7)
C	1	2	2	2	7(3.7)
D	10	12	12	4	38(20.3)

A: 子・名×親・名 B: 子・地位×親・名
C: 子・名×親・地位 D: 子・地位×親・地位

の名前で呼ぶであろう。

そこで、長子の呼ばれ方によって、長子的性格・次子的性格のあらわれ方が、どのように違うかを検討した。

ここでは、長子が、次子や親から何と呼ばれるかによって、次の4群に分類した。

A群：次子・母親両方から、名前または愛称で呼ばれる。

B群：次子からは「お兄（お姉）ちゃん」などという、地位をあらわす名詞で呼ばれる。母親からは、名前または愛称で呼ばれる。

C群：次子からは、名前または愛称で呼ばれる。母親からは、地位をあらわす名詞で呼ばれる。

D群：次子・母親両方から、地位をあらわす名詞で呼ばれる。

この4群に該当する人数を Table 6 に示す。このうち、C群は、該当人数が少ないので、考察の対象から除いた。

4と同様の検定をおこなったところ、長子的性格または次子的性格をあらわすものとして有意差のみられた項目数は、A群：11、B群：24、D群：19であった。各群の項目数の差を X^2 検定した結果、A群とB群との間に、有意差がみられた ($P < .05$)。項目の内容

Table 7 呼称方法と性格

A 群: 子・名×親・名		B 群: 子・地位×親・名		D 群: 子・地位×親・地位	
長子的性格	次子的性格	長子的性格	次子的性格	長子的性格	次子的性格
49. ひかえめ	30. 母に甘える	49. ひかえめ	30. 母に甘える	49. ひかえめ	30. 母に甘える
35. 母に口ごたえ	6. 父に甘える	21. 遠慮	6. 父に甘える	9. 話すより聞き手	40. 知ったかぶり
33. めんどうが嫌い	20. 依存的	1. 自分の用を押しつける	10. 母に告げ口	1. 自分の用を押しつける	22. 人のまねがうまい
7. 自制的	10. 母に告げ口	9. 話すより聞き手	28. お調子もの	21. 遠慮	28. お調子もの
1. 自分の用を押しつける	34. 嫉妬	43. すまじや	41. 父に告げ口	27. 起こされてもなかなか起きない	36. 外で遊ぶのが好き
	28. お調子もの	35. 母に口ごたえ	34. 嫉妬	33. めんどうが嫌い	10. 母に告げ口
		7. 自制的	4. おしゃべり		6. 父に甘える
		33. めんどうが嫌い	12. 強情		16. はきはきしてほがらか
		14. きちょうめん	40. 知ったかぶり		41. 父に告げ口
			36. 外で遊ぶのが好き		20. 依存的
			22. 人のまねがうまい		4. おしゃべり
			24. 食事の好き嫌い多い		24. 食事の好き嫌い多い
			2. せっかち		34. 嫉妬
			18. 一生懸命仕事する		
			16. はきはきしてほがらか		
11		24		19	

を、Table 7 に示す。

長子が次子から、「お兄（お姉）ちゃん」というような地位をあらわす名詞で呼ばれる場合、日ごろから、兄や姉は、弟や妹からうやまわれ、そのかわりに手本となって、しっかりと年下のきょうだいの面倒をみななければならないという立場であることを認識していると言えよう。ゆえに、「長幼の序」を重んじる親の養育態度が反映され、きょうだいの性格差異が明確にあらわれたと言え、このことは、1963年調査の結果と、同様の傾向を示している。

以上の分析結果から、長子と次子の生育環境について、この20年間に大きな変化がみられないということが示唆された。家族やきょうだいに関する文化は、表面的な社会変動の影響をほとんど受けていないと考えられる。

V 要 約

出生順位と性格特性との関連について、1963年におこなった調査をもとに、その年代的变化を検討するために、再調査を実施した。2人きょうだいの小学校5年の児童と、その親187組を対象に、質問紙によって調査した。性格特性に関するデータは、51項目の日常生活における行動の記述が、きょうだいのどちらによりあてはまるかという、相対的判断を求めることによって得た。

再調査の結果、次のようなことが見出された。

- (1) 長子的性格・次子的性格の存在は、非常に明確に検証された。しかも、1963年調査時の結果と比較して、ほとんど変化がみられず、固定化したものと言える。男子的性格・女子的性格についても、ほぼ同様のことが言える。
- (2) きょうだいの年齢差が近いほど、長子・次子の性格特性の差異は、はっきりとあらわれない。
- (3) 日常生活において、長子が次子から、きょうだい内の地位をあらわす普通名詞で呼ばれている場合の方が、固有名詞で呼ばれる場合よりも、性格特性の差異が明確にあらわれる。

以上、再調査の結果は、ほとんど、20年前の1963年調査と一致している。この事実は、家族やきょうだいに関する文化は、表面的な社会的変動の影響をほとんど受けていないということを示唆している。また、長子と次子の生育環境も、この20年間に、大きな変化はみられないと言える。

〈付 記〉本研究をおこなうにあたり、横浜国立大学学生 本間伸一君に、多大な御協力をいただきました。記して謝意を表します。

参 考 文 献

- Koch, H. L. (1955) The relation of certain family constellation characteristics and the attitudes of child toward adults. *child Developm.*, 26, 13-40.
- Koch, H. L. (1956 a) Attitudes of young children toward their peers as related to certain

- characteristics of their siblings. *Psychol. Monogr.*, 70, 1-41.
- 津留 宏 (1956) 家族呼称からみた家族関係. 教心研, 4, 12-20.
- 波多野誼余夫 (1963) 家庭における伝統的序列性と価値観の近代化—きょうだいの差別をめぐって (依田 明・清水弘司編 現代のエスプリ, 159, きょうだい). 至文堂, 70-77.
- 三木安正・天羽幸子 (1954 a) 兄的性格と弟的性格—双生児研究 1—. 教心研, 2, 1-10.
- 三木安正・天羽幸子 (1954 b) 双生児にみられる兄弟的性格差異と家庭での取扱い方—双生児研究 2—. 教心研, 2, 13-21.
- 依田 明 (1962) パーソナリティ形成の諸条件 (依田 新 他監修 児童心理学の進歩 1962). 金子書房, 207-235.
- 依田 明・深津千賀子 (1963) 出生順位と性格. 教心研, 11, 239-246.
- 依田 明 (1967) ひとりっ子・すえっ子. 大日本図書.
- 依田 新編 (1958) 家族の心理. 培風館.

〈付 表〉 性格に関する質問項目

1. 自分の用事を平気で人に押しつけたり, 頼んだりするのは
2. せっかちなのは
3. お母さんによくしかられるのは
4. おしゃべりなのは
5. よく考えないうちに仕事をはじめて, 失敗することが多いのは
6. お父さんにいつも甘ったれているのは
7. もっと遊んでいたい時でも, やめねばならない時にはすぐやめるのは
8. おこづかいをもらうと, 早く使ってしまうのは
9. あまりしゃべらないで, 人の話を聞いていることの方が多いのは
10. お母さんに告げ口するのは
11. 自分の着るものや持ち物について, よく気にするのは
12. 無理にでも, 自分の考えを通そうとするのは
13. お友達に人気があるのは
14. いつもきちんとしていないと, 気がすまないのは
15. お父さんによく口ごたえするのは
16. はきはきして, ほがらかなのは
17. 落ち着きがなくて, いろいろなことに気が散るのは
18. 面倒がらないで, 仕事を一生懸命にするのは
19. ときどき, ちょっとずるいことをしたり, ごまかしたりするのは
20. 少しでも困ることがあると, 人に頼ろうとするのは
21. 欲しいものでも, 遠慮してしまうのは
22. 人のまねをするのがじょうずなのは
23. おとなの話にまじろうとするのは
24. 食べ物に好き嫌いがたくさんあるのは
25. お父さんやお母さんのいいつけを, 素直に守るのは
26. 何か気にいらなことがあると, すぐに乱暴するのは
27. 家の人に起こされても, なかなか起きないのは
28. 人にほめられたりすると, すぐにお調子に乗ってしまうのは
29. 仕事をする時, ていねいに失敗のないようにするのは
30. お母さんにいつも甘ったれているのは
31. ちょっとしたことでも, すぐに気にするのは
32. よその人の前へ出ると, 恥ずかしがるのは
33. 面倒なことは, なるべくしないようにするのは
34. とてもやきもちやきなのは
35. お母さんによく口ごたえするのは
36. 外へ出て遊んだり, 騒いだりするのは

37. 人に負けるのが嫌いなのは
38. お父さんによくしかられるのは
39. 気に入らないと、すぐに黙りこむのは
40. すぐ、「ぼく(私)知っている」などと言って、何でも知っているふりをするのは
41. お父さんに告げ口するのは
42. おもしろいことを言ったりして、人を笑わせるのは
43. よそへ行くと、すましやさんになるのは
44. 宿題があると、気になって楽しく遊べないのは
45. 悲しいことを見たり聞いたりすると、すぐ涙をこぼすのは
46. しなければならぬと思った仕事は、最後までやり通すのは
47. 人の言うことに反対することが多いのは
48. 人の前に出たりするのをきらうのは
49. 何かする時に、人の迷惑になるかどうかをよく考えるのは
50. あれこれ迷って、なかなか決心がつかないのは
51. 人に親切にしてあげることが多いのは